

スポーツの初心者指導におけるエメルシオロジーの有用性の考察 ——スキー技術の習得事例から——

Betrachtung der Nützlichkeit der Emersologie in der Anleitung von Sportanfängern
—Von dem Fall des Skitrainingserlernens —

キーワード：言語化 ウェアラブルカメラ 生ける身体 間主観的な共同分析

Keywords: Verbalisierung, Wearablekamera, Lebende Körper, Intersubjektive Ko-Analyse,

武藤 伸司

永井 将史

MUTO Shinji

NAGAI Masashi

Abstrakt

In diesem Papier untersuchen und betrachten wir, ob die Emersologie auf verschiedene Sportarten angewendet werden kann. Die Emersologie ist Andrieu Bernards Forschungsmethode. Die Methode kann nützlich sein, um innere Empfindungen und unbewusste Bewegungen zu untersuchen. Wir untersuchen diesen Punkt am Beispiel des Erwerbs von Technik im Skisport. Als Ergebnis wurde deutlich, dass diese Methode für die Forschung in Situationen, in denen Anfänger Fähigkeiten erwerben, nicht wenig geeignet ist. Der Grund dafür ist, dass das Zeugnis von der Fähigkeit zur Verbalisierung abhängt. Eine Überprüfung, um diesen Teil auszugleichen, ist für unsere zukünftige Forschung erforderlich.

要旨

本論考において我々は、エメルシオロジーが様々なスポーツに応用可能であるか否かを検証し、考察する。エメルシオロジーとは、アンドリュウ・ベルナールの研究方法である。その方法は、内的な感覚や無意識的な動きを研究するために役立つと考えられる。我々はこの点を、スキーにおける技術の習得を事例にして研究する。その結果、この方法は初心者が技術を習得する場面の研究にはあまり適していないということが明らかとなった。その原因は、証言が言語化の能力に依存するからである。この部分を補うための検証が、今後の我々の研究に必要である。

I. はじめに

本論考は、ベルナール・アンドリュウの提唱するエメルシオロジーの原理と方法が運動技術習得の研究にどのような有用性をもたらすのかを考察するものである。アンドリュウのエメルシオロジーとは、生ける身体（いわゆる無意識的な感覚、身体性）の存在を認知することの重要性を目的にして、その生ける身体を意図的に明確な意識（言語化）へもたらすフレームの構築を目指すものである¹⁾。このエメルシオロジーについてアンドリュウは、生ける身体の原理的な解明のため、「対象者の運動中に一人称的な視点の動画を撮影し、それをもとに無意識的な運動感覚を「認知的な再・状況化」によって意識化するという方法²⁾を用いている。

この方法は、端的に言って「小型のウェアラブルカメラを用いた自己分析インタビュー³⁾」であり、これによって「活動のただなかにあっても主体の意識を逃れてしまう生ける身体の働きを特定する⁴⁾」というものである。つまり、研究の対象者がウェアラブルカメラによって得られた主観的な映像を見返すことによって、自らの運動中における無意識的な感覚を言語的に主題化し、分析するのである。これによってアンドリュウは、無意識的ではあるが確かに存在する生ける身体を対象者自身に考察させる。その考察の目的は、その運動における生ける身体への気づきを得ること、そしてそれによって生ける身体という存在の現実性を理解させるということである。そのことはさらに、応用的にその運動の技術的な発展やケガの防止なども考察にもたらすことになり、そうした面に対しても寄与できるとアンドリュウは述べている⁵⁾。

このように、エメルシオロジーの方法によって見出される有用性はいくつかあるが、その中で本論考が問題にするのは、「技術的な発展」という点である。ただこの点は、上述の通り、エメルシオロジーの目的が生ける身体の実在の現実性を明らかにすることであるため、アンドリュウにとっては応用的、副次的なものに過ぎない。身体の運動技術はこの方法によって見出し得るし、言及される⁶⁾のだが、しかしそれは生ける身体への気づきをもたらす契機として扱

われるため、この方法による運動技術向上のための活用が目的となっているわけではない。確かにアンドリュウは、このエメルシオロジーをフランスにおいてサーカスを専門的に学ぶ学生に施してその有用性を検証している⁷⁾。だがその他の運動や競技などに応用している事例は、公表されているものにおいてほとんどない⁸⁾。しかしながら、この方法によって明らかとなるとされている「主体の意識を逃れてしまう生ける身体の働き」という部分に注目すれば、例えばスポーツ運動学において、運動習得を分析する際の重要な観点となる無意識的な動感の特定にも役立ち得る可能性がある。したがって、本論考ではこの方法が運動の技術習得における分析や指導に対する有用性を有しているか否か、ということの検証と、それによる明確化が目的となる。

以上のことから、本論考では、以下のことを論じる。

1. エメルシオロジーの方法を遂行する際の前提を確認し、
2. その前提の下で、運動技術の習得時におけるその方法の運用条件を設定する
3. その運用条件の上で実施の運動習得の現場でそれらを適応し、有用性の検証を行い、考察する

これらのことを通じて、この方法が体育、スポーツ分野において求められる技術力向上や運動指導への方法論的な寄与、そして様々な種目に応用できる汎用性が認められれば、この方法のこの分野における可能性が広がるであろう。したがって、本論考はその可能性の端緒に立つための試論となる。

II. 検証方法の設定と提示

1. エメルシオロジーを実施する要件とその設定

アンドリュウがサーカスを事例に行ったエメルシオロジーの方法のプロセスを端的にまとめると以下のようになる⁹⁾。

- 1) 身体にまつわる哲学的な講義
- 2) ウェアラブルカメラを用いた身体動作の主観的な撮影

3) その映像に基づく運動中の身体への反省的な分析を促すためのインタビュー

1) は、アンドリュウがフランス国立サーカス芸術センター(CNAC)の研究プロジェクトにおいて、哲学ワークショップを実施することで「アーティストの身体経験を手段として活用することで、彼らに美学と身体文化ならびに芸術哲学を指導すること」¹⁰⁾が目的であった。これはつまり、研究対象者に対して研究の詳細な目的と、対象者に対して事前に基礎的な知識を持たせているということである。

そして2) は、運動する身体の一人称的な視点を得るためである¹¹⁾。これは、対象者に運動中の意識を喚起させるために有効であるとアンドリュウが考えているもので、彼のエメルシオロジーにおける具体的な事例研究のデータ取得の肝となる。

最後に3) は、対象者が自身の映像を見ながら動きを分析するというものである。しかしながら、インタビューの質問項目は明らかになっていない。だがアンドリュウの著書や論文を見る限り、少なくとも彼の研究目的となっている対象者ら自身が生ける身体の認識を持つために、半構造化インタビューのかたちで、大まかな質問と回答内容に応じたその都度の質問が行われていると考えられる。

以上がアンドリュウの実施したエメルシオロジーの方法の内実である。我々はこれらの内実に即し、かつ実践するために、対象者の選定や実施の設定を規定せねばならない。そこで、本論考における検証の条件設定を行う上で方針としたいのは、この方法が「汎用性を持ちうるか否かの検証」という点である。

具体的に言えば、我々が試みる検証では、アンドリュウがこの方法を実施した対象者とはある種反対の属性を持つ対象者、すなわち「サーカス以外の身体運動」で、「その運動の熟練者ではなく」、「専門知識をほとんど持たない」対象者に対して、この方法が有効であるか否かの検証を行うことになる。つまり、アンドリュウが実施した状況以外の事例にこの方法の形式を適用するということである。これらのアンドリュウが実施した条件とは異なる我々独自の前提条件を設定し、それでもこの方法の有効性が提示でき

れば、どのような運動種目、対象者のレベルにおいてもこの方法が扱える、ということが明らかになると考えられる。

したがって、これらアンドリュウの実施した3つの要件に即して、かつその内実を本論考の目的に沿わせたかたちで、検証の詳細を設定することとする。その設定は、以下の通りとなる。

- a) 対象者には実験の目的と方法だけを伝え、事前に哲学的な意義やその種目の専門知識の講義は行わない(ただし、実施中の技術指導は行う)
- b) ウェアラブルカメラは用いるが、同時に客観的な映像も通常のビデオカメラで撮影して主観的な映像と客観的な映像の両方を視聴させ、比較を行う
- c) 半構造化インタビューを行い、自己分析を促す質問をするが、本論考の目的に即して、運動技術の習得に関連する質問を中心に行う

a) については、本論考がアンドリュウのように「生ける身体」という哲学的な概念の理解を対象者が持ち得る必要はなく、むしろそうした情報や教義が先入観やバイアスになって、対象者の発言が純粋さを失う恐れがあるため、今回の検証では避けることとする。またそのことで、アンドリュウとの対比が可能になる。

そして、b) において主観映像だけでなく客観映像も用いるのは、従来の運動指導で客観映像の撮影は一般的であり、それがアンドリュウのアイデアである主観映像とどのような差異をもたらすかを確かめるために行う。これは運動分析において一人称視点と三人称視点のどちらが有用であるかを確認するための措置となる。

c) のインタビューは、本論考の目的である「技術的な発展」を見極めるため、すなわち運動技術の習得に関する分析のため、スポーツ運動学におけるコツとカンの発生という視点を質問の基軸にし、現象学の体験記述の方法(現象学的還元と本質直観)を用いる¹²⁾。これらのことから、本論考は対象者の主観的な感覚変化、情動変化に関する証言を研究データとして用いる質的研究ともなる。

2. 対象者、期間、場所

以上のことから、エメルシオロジーの方法を検証するための場として、東京女子体育大学の授業科目「スキー実習」(選択科目、集中授業)を選択し、その受講生が技術を習得する際に、どのような運動感覚の変化(発生)が生じているのかという点を、この方法において検証する。スキー実習を選択した理由は、「初心者参加者が多い」、「ウェアラブルカメラによる撮影が容易である」、「合宿形式の実習のため集中的にインタビューの機会を設けることが可能である」、ということから、a)、b)、c)の条件設定に適しているためである。そして検証の詳細については以下の通りである。

- 対象者：スキー実習を受講する学生で、班分けの際に初心者と判断された者(初心者班の中から特に経験のない3名を任意抽出)
- 期間：2020年2月21日(金)～2月23日(日)
- 場所：新潟県妙高市赤倉温泉 赤倉温泉スキー場
- 方法：1)ビデオカメラおよびアクションカメラによる動画撮影¹³⁾
- 2)撮影された動画を見ながらの半構造化インタビューを行い、同時にその様子も記録する(インタビューはICレコーダーでの録音とビデオカメラでの撮影を同時に行う)
- 3)インタビューの質問項目は、「その日の練習における全体の感想」、「技術向上の自覚」、「運動中の思考」、「動感の変化」、「主観及び客観映像に対する技術面での気づき」、「次の練習への動機づけ」などが主な項目となり、インタビューの内容やその流れ次第で適宜質問を変化させる
- 4)インタビューは3名同時に行い、質問項目に対してそれぞれの回答を求める

3. 倫理審査

本論考における調査、検証は、東京女子体育大学研究倫理審査委員会(研倫審・2019-41号)の承認を受けて実施した。

III. 検証結果の提示

1. 1日目

実習初日は14時から始まり、およそ2時間30分の活動であった。検証の目的の通り、初心者班を対象とした。最初は全体的な指導から始まり、後半に班ごとに分かれ、ゲレンデを滑り始めた。その際、参与観察のためについた班において今回の検証の趣旨のみを説明をし、任意に対象者を3名に定め、ウェアラブルカメラを装着させ、主観映像を撮影した。同時に調査者がその様子を一般的なビデオカメラで対象者らの活動を客観映像として撮影した。そして実習の後、班別ミーティングの際にインタビューを行い、内容を録音、録画した。これらの調査過程は、初日の趣旨説明を除き、調査期間の間すべて同様に行った

まず、調査者が初日の体験における全体的な感想について発言を求めると、「疲れました…足が痛いです」「全然できなくてへこみました。難しいです」「正直大変過ぎてもう帰りたいです」という、総じてネガティブな印象であった。

しかしながら、参与観察において調査者は、対象者らが初心者であるにもかかわらずある程度滑ることができていたことを確認している(その日は最終的にリフト1本分だけがゲレンデを上から降りてくることができた)。そのため、その際に滑ることのコツを掴めたか、という質問をすると、「コツと言うか…夢中であんまりよく覚えてないですけど、前の人のマネしようって、それだけ見ました」「自分のやってることと先生が言ってることと合ってるかが全然わからなくて、でも順番回ってくるからとりあえずやるって感じです。後ろの人に悪い」「転んでばかりで心折れてました」という回答であった。その際、対象者の一人から、「立つのがしんどくて嫌。(板が)外れるし。外れると入らないし。(板が)無い方が滑れる」¹⁴⁾という矛盾した、混乱した発言があった。

これについてさらに運動中の心理状態を尋ねると、他の対象者らも、「追いつてられ感がやばいよね」「人いっぱいいるし、申し訳ない感がハンパないです」「焦るよね。てかいきなり急すぎないですか?スパル

タすぎですよ」という発言があった。運動時に相当の切迫感があったようであり、指導についていくことに必死で、運動中における技術的な反省の記憶はほとんどない状態であったことが発言から読み取れる。

次に、ウェアラブルカメラの撮影による主観映像と客観映像交互に2、3度視聴させ、比較的によく滑れている場面について、自己評価、自己分析を求めた。しかしながら、ウェアラブルカメラの映像の物珍しさについてのリアクションは多分にあったが、技術的な気づきや変化については、「いや、何も…ついていかなきゃって、必死でした」「この時、ハの字、ハの字って言っていました」「怖いしなかったです。あと早く下りたい」というように、運動中に思っていたこと以上の言及は無かった。唯一、技術に関する言及として「ハの字」、すなわちボーゲンのポジションに関する発言については、「とにかく指導の通りに行わねばならない」という以上の認識はなかったようである。それでもさらに、調査者から技術についての感覚や思考について質問を重ねると、「何が技術なのか分からないです」「(指導の)先生がいろいろ言ってくれてたけど、必死過ぎて耳に入ってなかったです」という発言があった。

とは言え、いずれの対象者らも上の発言のようにハの字で滑るボーゲンのかたちがある程度できていたことと、緩やかながらも曲がるのができていたため、この点において気をつけていたことは何か、という質問すると、「ない。自然に曲がりました」「親指に力入れてました。曲がる方の」という、まったく無意識であった者と、ある程度技術について意識していた者との間に、両極端な回答があった。両者ともに曲がるのができていたにもかかわらず、無意識にできているということと、意識的にできたということの差がはっきりと分かれていた。

2. 2日目

2日目は9時から実習が始まり、午前は2時間30分、昼休憩を挟んで午後は3時間ほど練習が行われた。この日の午前のプログラムは、林の中でのクロスカントリーの体験であった。ここでも昨日と同様、対象者らにウェアラブルカメラを装着させ、撮影を行った。

午後はゲレンデに戻り、ここでも午前と同様に撮影を行った。特筆すべきこととしては、昨日においてスキーが初体験であった対象者らが、この日の午後の時点でほぼボーゲンができるようになり、左右への方向転換が可能となったという点が挙げられる。昨日の午後に転んでばかりであった対象者以外の学生らの転倒率も大幅に下がり、練習時間の終盤に他の班に混ざってトレーンを行うまでになった。

この点について対象者らにインタビューを行うと、その回答としては、「多分、なだらかだったから?だと思います」「怖いところがあんまりなかったです」「ちょっと慣れた感があります」というものであった。この「慣れた感じ」という点についてさらに質問を重ねると、「なんだろ…滑ってる感じ?」「ハの字に慣れたって感じです。太ももしんどいけど、割とプレーキとか、スピード抑える感じが昨日よりは、って」という感覚であったようである。昨日のインタビュー内容と比較すると、いくらか動きの感覚に対して言及が見られるようになった。

また、この理由について尋ねると、「なんか滑る感じが、朝の、クロスカントリー?細いの(細い板)でやったので、スーって行くのが分かりました」というように、「滑る感じ」というスキー初心者において最も重要な感覚を掴んだということが述べられた。この感覚について、対象者らがその感じを掴んだ「この時」を指摘したのが、クロスカントリー時の主観映像と客観映像をともに見ているときであり、それは滑りながらの歩行を行っているときであった。

この時に何を意識していたかを尋ねると、「怖くないし、散歩するみたいで楽しかった。写真撮れたし」「昨日とか午後みたいなのだと、ちゃんと滑んなきゃみたいのがあってプレッシャーだけど、朝の(クロスカントリー)は楽でした。軽いし痛くないし。明日もあれでいいです」「やっとスキー楽しんだって感じしたよね」という、その時の雰囲気や心理状態が言及された。

さらに滑りながら歩くことのコツや滑る感覚、板に乗る感覚などを追加で尋ねたが、「正直よくわからない」、「慣れたから」、「斜面が緩やかだから」というものであった。調査者側の印象としては、技術が向上した実感はあるものの、その要因はあまり意識化されていないようであった。これらの質問は、昨日と同様、継

続的かつ上手く滑りながら歩くことができているところの主観映像と客観映像を見ながらの質問ではあったが、それらの映像自体から動感に関する言及は引き出せなかった。

3. 3日目

3日目は9時から実習が始まった。天候は雪で吹雪いており、視界が悪く、対象者たちの気分はすぐれなかったようである。これまでと同様にウェアラブルカメラを装着させ、練習を始めた。リフトを乗り継ぎ、かなり上の方まで移動し、中級者コースを使用しての練習であった。対象者らは、昨日の緩斜面とかなり感覚が異なったようで、昨日よりも苦戦し、転倒回数が増えていた。だが30分ほど経つと慣れてきたようで、対象者以外のほとんどの班員が斜面に適応し、緩斜面でなくとも昨日のような滑りを取り戻したように見えた。

とは言え対象者らは、斜面の傾きに対して恐怖心を持ち続け、スピードが上がるたび転倒し、先頭の指導員に遅れることがあった。心が折れかかるような対象者もあり、運動中「何も楽しくない」という感想が漏れていた。しかし、昼の休憩を挟んでゲレンデに戻ると、体力の回復のせいか、遅れ気味の対象者らも集中力を上げ、転倒回数が減り、昨日のような滑りを取り戻した様子であった。

このことについて、小休止の最中やリフトでの移動の際に、主観映像と客観映像の両方の動画を見ながら話を聞くと、「昨日はクロスカントリーを行ったから上手くできた」という内容の発言が対象者ら全員から聞かれた。例えば、「クロカンやった後だと、これで滑るのが楽になったみたいな感じがしました」「そう、分かる!」というものである。このことに関して、参与観察において調査者からはさらに技術が向上したように見えると伝えると、「そうですね?なんか昨日の方が上手く滑ってたような気がします」という反対の発言があった。さらに、詳しくその点を話して欲しいと調査者が質問を重ねると、「なんかバランスとれるって言うか…」「かかとかついてないやつって自分で滑ろうとしなきゃいけないじゃないですか。それで感じがつかめたような気がします」「確かにあの細いやつの方が

楽だった」「午前中にあれで滑ったから、午後はなんか楽に滑れたなって思っていました」と、対象者らはそれぞれに昨日のクロスカントリーにおいて得た感覚と今日の感覚との比較を述べた。

この比較に対して、調査者がコツを掴んだということか、と質問をすると、「コツかどうかは分かんないです。今日は力入れなくてできたような…」「細いやつの滑る感じで慣れたみたいだな」ということであった。だが実際のところ、クロスカントリーのような滑りながら歩くことと斜面の滑走はかなり異なる動きになる。そのため、むしろ混乱を来たすのでは、と調査者が尋ねたところ、「むしろあれで滑った方が上手く滑れるんじゃない?」「毎回あれを先にやってから滑った方がいいなって思います」という感想が対象者らから挙がった。

このように、クロスカントリーは斜面だけでなく平地の移動も同時に行うものであるが、対象者らにとってそれらの動きがスキー用具の扱い方やそれによって滑る感じに与えた影響は大きいようで、斜面を滑る前にその準備ができていれば、すなわちそれらの感覚をつかんでいれば、「もっと上手く滑れるのに」、ということであった。この点については、2日目のインタビュー結果からも裏づけられる¹⁵⁾。

IV. 結果に対する考察

以上が検証のために行った調査の結果であった。これらの結果をまとめれば、今回の検証のために設定した条件 a)、b)、c) に即して以下の点が浮き彫りになる。

- a) 対象者は、エメルシオロジーの意義および方法はもちろんだが、スキーそれ自体に対する用具的、技術的な知識を持たないため、体験において生じた感覚に対する言語化が困難である
- b) ウェアラブルカメラによる主観的な映像および一般的なビデオカメラによる客観的な映像どちらにおいても、映像は特定のシーンに対する対象者の想起に役立つ程度に留まり、映像自体から運動の分析やその技術の分析を引き出せているとは言い難い

c) 半構造化インタビューにおいて、インタビュアーの指摘と焦点化、その深掘りがなければ、対象者の証言は体験の記述はぼんやりとした全体的な印象に留まるが、しかしインタビュアーの質問の仕方によって、ある程度有意な証言を引き出すことができる

1. 体験の言語化のための条件

まず、a) の結果についてだが、対象者への自己分析インタビューの際、対象者に競技ないし運動に対する十分な知識と経験がないと、そもそも言語化のための言語が選択できないということが明らかとなった。アンドリューがCNACのアーティスト(パフォーマー)らにこの方法を行った際には、上述の通り事前の哲学ワークショップが行われていたし、かつ対象者であるパフォーマーらは、第2学年¹⁶⁾ということで、用具や技術についての知識を十分に持っていた。つまり、アンドリューがこの方法を実施した際にパフォーマーらが「自身の身体活動の痕跡に関心を集中させた。認知的な再-状況化(resitu)のなかで、彼らは自身の言葉を用いて行為のプロセスを説明しコメントすることで、自らの行為を言語化できた」のは、体験を言語化可能にするための下地が整っていたことに拠る、と言えるだろう。したがって、体験を言語化して明示するためには、サーカスやスキーに限らず、何らかの競技についてある程度の知識、理解、そして経験の蓄積を要するということである。

しかしながら、実際のところこの点は当然の結果とも言える。例えば、どんな人間においても何かが体験され、かつそれが残っていくということは、「現象学的に」という断りを入れずとも一原理的に生じており、疑い得ない¹⁷⁾。だがそうした体験は、特に感覚的であるほど、それを他者が理解可能な程度に明確な言葉へと仕上げていくことは、それ自体の経験(語り得る、伝え得る能力)の積み上げもまた必要となる。それは何もスポーツに限ったことではないだろう。つまり、いかなる体験もある程度の上級者や熟練者、ないしはその途上であってもその対象へ精通しようとする根本的な動機づけにおいて学びのある者(知識を得、言語化について努めようという姿勢のある者)でなければ

ば、有意な言語化は困難なことなのである。実際、今回の検証において対象者らは、自身の体験やその感じを質問に対して回答しようとしたとき、「(板が)無い方が滑れる」という混乱した表現や、「慣れた感じ」という大雑把な表現、「正直よくわからない」という体験それ自体に焦点を当てられていない表現などが見られた。

だがこれらのことは逆に言えば、上級者や熟練者についてはこの方法による体験の言語化は可能性を持ち得るということでもあり、また競技に対する十分な知識が蓄積していれば、それをういた言語化も可能であろうということになる。実際、調査におけるインタビューの一人はスキーの上級者でも熟練者でもない(スキーの公的な指導資格を持たない。そのため指導はせず参与観察に徹した)が、競技に対する知識を事前に持つことで、参与観察から質問すべき技術的なポイントをある程度押さえることができている(ちなみに調査者のもう一人はスキー指導資格を持っており、実習の中で指導を行っている)。したがって以上のことから、エメルシオロジーの方法を実行するには、調査者と対象者の双方に体験を言語化可能にする能力が求められるということになる。

2. 運動体験の分析を引き出す映像の有効性

次にb)のウェアラブルカメラによる主観的な映像の有効性であるが、この点も上記のa)における問題点と共通する部分がある。対象者らは、主観映像にしる客観映像にしる、それらの動画を見た際のリアクションは、両者において差はなかった。確かに、2日目のインタビューにおいて両映像は「滑りの感覚を掴んだ瞬間」を「この時!」と指摘し得るのに役立つが、アンドリューのアイデアとして特徴的である主観的な映像における一人称的な体験(運動中の感覚)の可視化という利点を示すものではなかった。だからと言って、他方の客観映像が証言を引き出すことに寄与したかと言うと、そうではなかった。

アンドリューが述べる通り、ウェアラブルカメラで映像を撮ること自体が重要というよりは、体験している本人や研究者が「パフォーマーの状況に埋め込まれた身体的行為に共感すること、いわば、これらの行

為をみずから生きることによって、より全体的な反省を可能にせねばならない。そうすることで、意図的かつ意識的な行為と、非意図的かつ無意識的な行為を直接的に区別することが可能になる¹⁸⁾ という点が重要であることは、本論考においても同意するところである。しかしながら今回のスキーマの映像は、アンドリュースがサーカスの事例で示した空中ブランコのアクロバットにおいて、パフォーマーらが意識していなかった自身の動きを可視化できた際の「意図されていないものを録画することで、スリルに満ちたイメージ、いまだ研究されていない環境、活動の核心をなす瞬間的な姿勢¹⁹⁾」ほどの映像ではなかった、ということも実情としてある。今回の録画に映し出されていたものは、単調な左右への動きと、転倒した際の画面のブレがほとんどであった。初心者の滑りの映像であることから、急斜面を下るスピード感や、複数のコブをクリアしていくような技術的な特徴などはないため、映像自体の面白さ、運動中の感覚的な記憶を触発して証言まで引き上げるような特徴は特に無かったのである。もちろん全く何もないということではなく、主観映像から確認できる画角の安定性やスピードの増減、加速度の感覚などは、調査者や対象者らで読み取れたし、共有もできた。

ただ、a) で述べたように、インタビュアーが上級者や熟練者、指導者、あるいは技術的な知識を持つ者などでなければ、変化や特徴を指摘することがほとんど不可能に近い映像素材であった。実際、対象者らにとっては、インタビュアーに指摘されなければ、それらの見るべきポイントはただ流れて行くだけで、技術的な発展的な変化が生じた瞬間を自己分析的に指摘することは、指摘されて初めて気づくようなものであった。したがって、むしろこうした単調で変化の少ない映像から何を読み取り得るか、という点こそが重要であるということが、今回の結果ら指摘し得るであろう。

このようなことから、今回の検証では、主観的にしろ客観的にしろ、「映像を見る」ということによって、対象者ら自身が運動を端的に自己分析できたわけでもなく、また次の日の練習へ向けて有効活用したわけでもない、と言わざるを得ない。特に後者の点について

では、「見た」ことが単純に「できる」ことへ繋がらないのは、技術的な知識や技術向上の関心の薄い初心者にとっては当然と言えるだろう。

3. 「何を」インタビューするのか

しかしながら、だからこそ初心者を対象にする場合は特に、映像を分析する指導者や研究者の視点や分析の力量が問われるのだとも言える。例えばスポーツ運動学の金子明友は、「運動課題を習得させるためにビデオ映像を見せるのであれば、生徒の動感志向性を〈触発化〉できる能力が教師に問われる²¹⁾」と指摘しており、また同分野の研究者である佐藤晋也が「“映像を見た”という経験が、結果としてその後の運動発生にプラスの意味をもたらしたことは否定されるものではない。しかし、そのことにより受動的地平を含めた動感意識の中で何が「できそうだ」という確信へと導いたのかは、学習者の動感様相の変動を注意深く観察しなければ見えてこない²²⁾」と述べている。つまり、指導者や研究者が映像から運動する者の感覚や志向(思考)をどこまで深く、広く見て取ることができるか、という点を両者は指摘しているのである。

そもそも感覚はおおよそ無意識的なものであり、むしろ言語化以前の、いわば言語化のための素材であることからして、明示することが難しいものである。結果において示した通り、運動中の対象者らの意識においては、指摘されればそうと分かる感覚の体験的な記憶がもちろんあるのだが、しかしその最中であっても、あるいは事後的な反省においても、動きの感覚よりも雰囲気や感情などを思考した内容の方が支配的である。しかも、上述の通り対象者らに感覚を適切に言語化する知識や語彙、それらを操る能力がなければ、その発言は結局のところ曖昧模糊なものとなる。対象者らの発言に、明示的に顕在化していないが、しかし確かにあった感覚を見出し、適切に言語化する役割が、まさに指導者や研究者、今回の検証で言えば「インタビューの仕方」に求められる。したがって、金子が「動感志向性」として運動の感覚の深さを、佐藤が「受動的地平」としてその広さを映像分析の要件に据えるということは、c)の「インタビューによって有意な証言を引き出す」ということについて、重

要な方針を与えるものと言える。

そのためこの点については、すでに筆者が指摘している通り、エメルシオロジーが生ける身体ということで無意識的な存在の確定を目指すのが中心的な目的であるとしても、スポーツ運動学の方法である借問という間主観的な共同分析が必要になる、と主張できるのである²³⁾。分析の密度を上げ、対象者の現実に肉薄するためには、特に本論考の目的である「技術的な発展」の実情を明らかにするためには、指導者ないし研究者と対象者が現場でそれぞれの身体が「掛かり合う」²⁴⁾ 体験をともにする必要があると、言い得る。参与観察において行動をともにし、対象者との距離感を適切な近さにすることで、インタビューの際の緊張感を解く必要があり、それは自然な発言を引き出すポイントにもなるであろう。

実際、借問という方法において畳み掛けるように質問を深くまで継ぎ足していくことは、対象者らの拒否感(面倒くさい、もう答えなくてもいいかなど)を読み取り、インタビューの最中に調整していく必要がある。特に今回スキーに対してポジティブな姿勢でなかった初心者の対象者らから、コツの感覚について、「力を入れないこと」「道具や雪、または滑ることに慣れること」という、スキー技術のコツとしては最初の段階のものではあるが、それを証言として引き出したことは確かである。このコツに対する2つのポイントは、技術レベルにおいてそれらの内実が変わろうとも、共通の、本質的なものであると言い得るものである。その点でこの方法の有用性は、まさにインタビューの仕方において担保されるものだと主張し得るのである。

以上のことから、今回の検証によって、本論考は以下の結論を提示する。それは、「エメルシオロジーの方法をそのスポーツの初心者を対象として技術発展の分析に使用するためには、アンドリュースと同じ方法では上手くないかため、別の方法を検討する必要がある」、ということである。したがって、この方法をそのまま、有効に活用するためには、「初心者ではなく上級者ないし熟練者を対象者とすること」「対象者に言語化のための様々な知識を事前付与すること」「指導者ないし研究者が(主観ないし客観)映像を

読み解く能力」が少なくとも前提条件として必要になると、今回の検証から主張できるのである。そうした意味で、今回の検証で指針とした、この方法の汎用性は、このようにいくつかの条件が付くことから、手放して「高い」とは言い難いということになる。

V. おわりに

本論考の考察は、アンドリュースのエメルシオロジーの本来的な目的から逸れているものであったことは確かである。しかしながら、アンドリュースがこの方法で目指す「生ける身体の解明」自体は、スポーツ運動学や身体学にとって共通の目的であることは間違いない。なぜなら、それを解明することによって、無意識下で流れ去る動感の分析がさらに進展する可能性を持つからである。

すでに筆者が言及している通り²⁵⁾、この方法がアンドリュースにとってもアイデアに過ぎないことからして、それこそ様々な改良を加え、目的に合った方法へと作り替えていく必要が生じることは当然であると言える。我々は、目的とする動感分析のためにさらに有用な方法論を開発し、検証を繰り返していくことで、スポーツ技術や身体能力の発生という問題に対して、少しでも近づいていかねばならない。したがって、本論考における考察は、その試行錯誤の一事例として役割を果たし得たと言い得るだろう。この検証結果の反省と改良は今後の課題となり、さらなる研究を要する。

付記

本研究において、代表研究者の武藤伸司は、研究の総括、プログラムにおける調査と参与観察、本論の執筆を担当した。共同研究者の永井将史は、プログラムにおける調査と参与観察を担当した。

なお、本研究の遂行に際して、東京女子体育大学名誉教授の大石示朗先生と同教授の若山章信先生にご助言とご協力をいただきました。心より感謝を申し上げます。

参考文献

- Andrieu, B., *Sentir son corps vivant. Émersiologie 1*. Paris, France: Vrin, 2016
- *Apprendre de son corps: Une méthode émerisive au CNAC*. Presses universitaires de Rouen et du Havre, 2017
- *La Langue Du Corps Vivant: Emersologie II*. Librairie Philosophique J Vrin, 2018
- Andrieu, B., and Kurasima, A. “The Body Behind the Spectacle: Capturing Emersion of the Living Body of Circus Performers” 『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号、日本スポーツ社会学会、2018年(邦訳:アンドリュウ・ベルナル、倉島哲「スペクタクルの背後の身体——サーカス・パフォーマーの生ける身体のエメルジオンを捉える」『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号所収、倉島哲訳、日本スポーツ社会学会、2018年)
- 金子明友『運動感覚の深層』明和出版、2015年
- 倉島哲「社会学的身体論の批判的検討とエメルシオロジー」<http://waza-sophia.la.coocan.jp/data/20021601.pdf> (2021.11.23)
- 武藤伸司「身体学研究の展開——研究における方法論の構築とその実践——」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第53号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2018年
- 「スポーツ運動学とエメルシオロジーにおける方法論の比較考察」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第56号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2021年
- 「時間と発生を問う——時間意識と受動的総合の相関性について——」『スポーツ運動学・現象学講座2 わざの伝承——加藤澤男・金子明友の〈あいだ〉——』金子一秀、山口一郎編著所収、明和出版、2021年
- 佐藤晋也「運動学習における映像観察の意味に関する運動学的考察」『スポーツ運動学研究』第33巻所収、日本スポーツ運動学会、2020年

注

- 1) ベルナル・アンドリュウのエメルシオロジーについて、Andrieu, B., *Sentir son corps vivant. Émersiologie 1*. Paris, France: Vrin, 2016、Andrieu, B., *Apprendre de son corps: Une méthode émerisive au CNAC*. Presses universitaires de Rouen et du Havre, 2017、Andrieu, B., *La Langue Du Corps Vivant: Emersologie II*. Librairie Philosophique J Vrin, 2018を参照のこと。特に邦語訳のもので端的に内容がまとめられているものとして、アンドリュウ・ベルナル、倉島哲「スペクタクルの背後の身体——サーカス・パフォーマーの生ける身体のエメルジオンを捉える」『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号所収、倉島哲訳、日本スポーツ社会学会、2018年、pp. 39- 53 (Andrieu, B., and Kurasima, A. “The Body Behind the Spectacle: Capturing Emersion of the Living Body of Circus Performers” 『スポーツ社会学研究』第26巻、第2号、日本スポーツ社会学会、2018年、pp. 25- 38)、および武藤伸司「スポーツ運動学とエメルシオロジーにおける方法論の比較考察」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第56号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2021年、pp. 11- 20を参照のこと。
- 2) 武藤(2021)、p. 12参照。
- 3) 武藤(2021)、p. 14参照。
- 4) アンドリュウ、倉島(2018)、p. 44参照。
- 5) アンドリュウ、倉島(2018)、p. 45を参照のこと。
- 6) アンドリュウ、倉島(2018)、pp. 46- 47を参照のこと。
- 7) アンドリュウ、倉島(2018)を参照のこと。
- 8) アンドリュウ自身の事例研究はサーカス以外に論文や書籍等で明示されているものはないが、例えば倉島哲は太極拳における身体技法習得の事例についてエメルシオロジーを用いて考察している(倉島哲「社会学的身体論の批判的検討とエメルシオロジー」<http://waza-sophia.la.coocan.jp/data/20021601.pdf>

- (2021.11.23))。
- 9) アンドリュー、倉島 (2018)、p. 44を参照のこと。アンドリューが述べた3つのフェーズを簡潔に示したものが、本文の箇条書きである。
 - 10) アンドリュー、倉島 (2018)、p. 44参照。
 - 11) この撮影方法の詳細について、アンドリュー、倉島 (2018)、pp. 44- 45を参照のこと。または、武藤 (2021)、pp. 14- 15を参照のこと。
 - 12) この点について、武藤伸司「身体学研究の展開—研究における方法論の構築とその実践—」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第53号所収、東京女子体育大学・東京女子体育短期大学、2018年、pp. 68- 70を参照のこと。
 - 13) ビデオカメラは、Panasonic社製、デジタルハイビジョンビデオカメラ(HC-V480MS)を使用した。ウェアラブルカメラは、GoPro社製、GoPro HERO7 (CHDX-701-FW)を使用した。特にGoProは、アンドリューが実施に主観的な動画撮影のために用いており、本論考の検証のために同様のものを用意した。
 - 14) ()内は筆者が補足した。以下、発言内の()はすべて同様である。
 - 15) この点について、後にこの班の指導員であり、本学の野外教育研究室の主任に話を聞くと、「経験的に、プログラムの前半クロスカントリーを配置する理由は、その方が技術向上のスピードが上がるのだ」ということであった。つまり、指導者の狙いが、対象者らの証言と一致しているということである。ただ、その他の野外教育の教員からは、「この点は確かに経験的にその通りではあるが、理論化できておらず、そうした狙いで他大がスキー実習のプログラムを組むことはあまりない」という説明があった。今回のエメルシオロジーの方法の検証という点を切り離して、スキー技術習得の経過と要因のみを明らかにするという目的に限れば、これらの対象者らや指導員の言質は、今後の研究において重要な役割を担うと予想される。
 - 16) アンドリュー、倉島 (2018)、p. 44を参照のこと。
 - 17) アンドリュー、倉島 (2018)、p. 45参照。
 - 18) 意識における体験の明証性とその把握について、武藤伸司「時間と発生を問う—時間意識と受動的総合の相関性について—」『スポーツ運動学・現象学講座2 わざの伝承—加藤澤男・金子明友のくあいだ—』金子一秀、山口一郎編著所収、明和出版、2021年、pp. 173- 175を参照のこと。
 - 19) アンドリュー、倉島 (2018)、p. 44参照。
 - 20) アンドリュー、倉島 (2018)、pp. 44- 45参照。
 - 21) 金子明友『運動感覚の深層』明和出版、2015年、p. 142参照。
 - 22) 佐藤晋也「運動学習における映像観察の意味に関する運動学的考察」『スポーツ運動学研究』第33巻所収、日本スポーツ運動学会、2020年、pp. 66- 67参照。
 - 23) この点について、武藤 (2021)、pp. 15- 16を参照のこと。
 - 24) 武藤 (2021)、p. 16を参照。
 - 25) 武藤 (2021)、p. 16を参照のこと。